
発展学習03-1 好子の定義はなぜ循環論にならないのか

「強化」や「好子」の定義について説明を受けた時、えっ？それって循環論（トートロジー）ではないの？と疑問に思われる方がおられると思います。そのような疑問を持たれる方は、この問題を精密に考察している方であり、大変結構なことだと思います。

まず、そもそも強化とは何ぞや？ということをも復習してみます。杉山他『行動分析学入門』（産業図書、1998、28頁）では、強化は

ある行動の直後に好子【“コウシ”、長谷川注：正の強化子】のことが随伴し、その結果、その行動がより起こりやすくなる事実そのものを指す。

というように定義されています。

また、同じく杉山他(1998、5頁)では、好子は

行動の直後に出現すると、その行動の将来の生起頻度を上げる刺激、出来事、条件

として定義されています。

これらの定義だけから見ると、「好子の随伴によってある行動が増えたのは強化されたからだ」というのは、循環論になっているように見えます。なぜなら、好子の定義には「その後の行動が増える」が含まれており、定義されている言葉を「なぜ増えたのか」という説明に使うことはできないからです。それは、「ある行動が増えたのはそれをしたいという欲求が高まったからだ」、「それをする気が増えたからだ」、「それをしたいという意識が高まったからだ」などと同様の循環論と言えます。

念のため繰り返すと、行動が増えた（強化された）という観察事実をもって好子を定義している以上は、行動が増えた原因に好子概念を用いることは循環論に陥るのではないかと、という議論です。

これに関連する話題は、行動分析学会年次大会のシンポでも何度か取り上げられたことがあります【例えば、日本行動分析学会第19回年次大会（2001年）ご参照】、結論的には循環論にはなりません。

その有力な論拠としては、以下の2点が挙げられます。

- (1) 場面間転移性 (Meehl による主張) : ある事象が強化事象であるということを知ると、その事象が (同一個体または、同じ種の別の個体の) 別の行動の強化刺激にもなりうると予見できること。

→ 特定個人の中では好子や嫌子は比較的安定的に作用するため、ある行動を強化している好子が別の行動の好子になる可能性がきわめて高いということ。これによって、一度も生

じたことの無いような行動を形成することも可能となる。

(2)制御可能性：ある事象が強化事象であるということを知ると、その事象を随伴させる確率（強化率）や随伴のパターン（強化スケジュール）を操作することによって、行動の起こり方を制御することができること。

→好子や嫌子を同定できれば、それを操作することで行動を変えることができる。

具体例として、例えば、ある子どもが算数ドリルを1枚完成するたびに動物シールを与えたたとします。これによって、算数ドリルをこなす行動が確実に起こるようになったとすれば、それは強化されたといい、また、動物シールは、好子として定義できます。但し、この枠組みだけでは、

(a)動物シールを与えることによってドリルをこなす行動が増えた。よって動物シールは、その子どもにとっての好子として機能することが確認された。

(b)算数ドリルをこなすようになったのは、動物シールという好子が出現し強化されたためだ。

という2つの言明は循環論になってしまいます。なぜなら、(a)で定義した好子という概念が、(b)では説明概念として使われているからです。しかし、これは、以下の「やる気」概念のトートロジーとは明らかに違います。

(c)子どもがドリルをこなしたのは、やる気があったからだ。

(d)子どもがドリルをサボったのは、やる気が無かったからだ。

「やる気」概念の場合は、場面間転移性も制御可能性も全くないからです。

では「シール=好子」はOKで、なぜ「やる気」はダメなのでしょう、まず(1)場面間転移に当てはまるかどうかを考えてみましょう。ドリルをする時の「やる気」を吸い上げてお手伝いをする行動に適用することは全くできませんが、動物シールは、この子どものお手伝い行動を強化する上でも有効となります。

次に(2)制御可能性はどうでしょうか。第三者が「やる気」を制御することはできませ

ん*1。いっぽう、動物シールの場合は、それを与える頻度を制御することができます*2。

要するに、「強化」と「好子」の定義は、行動分析学のゴールである「行動の予測と制御（影響）」の達成に貢献します。いっぽう、「やる気」は、行動が活発に起こっている状態を記述しているだけであり、予測や制御（影響）の役には立たないことが分かります。

*1 「やる気を出せ」といって励ますのは、いっけん「やる気」を制御しているように見えますが、実際は「やる気」そのものを増やしているのではなく、「やる気を出せ」という言語的激励自体が付加的な好子になるためと考えられます。

*2 子どもが、ドリルの完成という達成型の好子で強化されるようになれば、もはや動物シールという付加的な好子は不要となります。お手伝いの場合も、家族への貢献自体が好子となれば動物シールは要りません。